ほそき道を傳ひて別府の里にくだりつきぬ。ゆある家にやどりて、曲浦の景色を見渡すに、月いと清かりければ、

雲迷ふみやまおろしの跡もなく
月澄みわたる濱の松原

あくればもちの日。もと来し道をたづねて夕暮に家に帰りぬ。此夜いたく更けて、鶴見の嶽を望みて、傾く月に対してよめる。

たれかまた瀧のやどりに眺むらん
行へゆかしき山の端の月

史料紹介

蝶斎起友 著

『温泉めぐ里』

佐藤 勉

この『温泉めぐ里』は別府市立図書館に所蔵されている古文書を再整理している時に出てきた物で、著者の蝶斎起友が別府温泉へ湯治に出かけた時の紀行文である。

蝶斎起友は、本姓は水之江、通称は弥五郎といい、豊前国宇佐郡封戸郷水崎村（現在の豊後高田市水崎）の庄屋であった。

父は弥八郎といい、金谷弗水の俳諧の門下生で、弗水より静斎の俳号を授かり、三世静斎月虚となった俳匠である。この静斎の号は弗水が日田の広瀬月化より授かった号である。

弥五郎は水之江弥八郎の弟子の佐々木鶴歩（四世静斎）に俳諧を学び、静斎の号を鶴歩より授かり、月虚の号を父の弥八郎から譲られ五世静斎月虚となった。

嘉永四年（一八五一）、金谷弗水の第二十五回忌にあたり、三世静斎月虚と呉詠両人によって、俳諧集『続春雪集』が編纂された。この『続春雪集』の中で

「月虚　更（あらため）　如灰・起友　更（あらため）　月虚」

とあるから、起友が父の月虚の号を譲られたのは嘉永四年頃と考えられる。

『温泉めぐ里』の文中に

「いにし年は鯨寄てふ大海の端をへぎりて、新開の塩田ものせよとの公命をかゝふりて」

とあるのは、豊後高田市水崎新開のことで、寄藻川の河口の東岸にあり、天保十五年（一八四四）に開かれた塩田（現在は水田）である。このことから、この『温泉めぐ里』が書かれたのは、弘化二年（一八四五）四月（卯月）であったと考えられる。

弥五郎の没年は明治二十三年（一八九〇）九月八日、仏号は「釈月虚涼味庵居士」、俳号は「蝶斎起友」「二世月虚」「五世静斎」「涼味庵」であった。編纂した俳書は『続春雪集　続編』『みなと入集』などがある。

弥五郎の子の藤十郎は、塩の買売を行い、「玉木屋」の屋号を使用した。藤十郎とその子の毅も俳諧をよくし起友の号を用いた。また、弥五郎の二女の花婿の薫平は水之江姓と称し、塩田経営に力を尽くし、明治三十一年（一八九八）八月に明治政府の塩業調査会の委員、水崎村の村長などを歴任したが、晩年には塩翁と号して俳諧を楽しんだという。

「表紙ウハ書」（縦26㎝×横18㎝）

予　微痾を抱て年あり、とし〳〵別府・鉄輪の温泉に浴する事怠らず。さるに、いにし年は鯨寄てふ大海の端をへぎりて、新開の塩田ものせよとの公命をかゝふ

りて、終に此事を欠く。今年社と初春より心かまえはしつれど、内外のことにかゝづらゐて、雪山の鳥の啼らむやうに、けふよ明日よと、明し暮して、はや卯月も半過ぬるころ、道祖神のまねきに逢えるにや、こはしらねどもほだしにまつはるゝ事の浅間しとおもひ捨て、あはたゞしう二十日てふ日杖を発する事とは成りぬ。けふは空も良く晴渡りぬ、去年よりの望のかなへりし故にや、なりわゐのかしましきを、のガれたるゆえにや有ケむ、我ながら心いさましく、先にすゝめる口つきと、後へにつゞく僕を詞がたきに、馬上よりあれのこれのと

道の暑　うちで思ふた程はなき

立石峠より下る弓手に因位[1]の尊像立セ玉ふ。かたえに一老樹あり

騎ながら一汗入れる木下かな

鹿鳴越にて

馬上より指揮（摩）して折や山つゝじ

吹あげてふ處にて、午時、かれゐのわり子を聞き一瓢の酒にほろ酔て、馬を是より返しける。それより津島・頭成・小浦を経て、古ま坂を越行けるに、暑わあつし、此わたりの景光は余所に見なしつゝ、杖にすがつて、やおら石垣原にいたる。此原や、いにしへ大友家の忠臣吉弘某[2]の墳のしるし、先あわれなり。堕涙の碑もまのあたりに見る心地す、若九原[3]の魂をして起さしめば、いよゝ我腸を寒からしむしべし。

懐古

陰々緑樹古墳前　往昔英雄苦戦場　骸朽石垣原上土

名声千載口碑傳

はや日も西山に臼つきぬ。心さす處までハ、もろこしの三里にも過なむ、いそがし玉へと僕にせつかれつゝ行程に、おほまが時[4]、別府なる竹田屋がり草鞋を解く。夕げたうへて、先砂温泉（ゆ）に入て寝ばやと海辺に至り、異国（コト）こと郷の人々に打まじりて、砂に埋もれ、一むしむしけれバ、はや亥中[5]の月のかすかに登りぬ。

温泉上りの赤身並ぶや夏の月

程なく汐のみち来ぬといふほどこそあれ、皆々ゆかたハき、はさみ帯引しろひなどして、おのがまに〳〵宿り〳〵に帰る。いづこもおなじ明安き夜の寝返りさへ

せぬ間に廿一日に成たり。

蚤の苦を一夜わすれぬ　旅つかれ

豫契り置し事さえあれハ、芦月上人[注6]の旅舎すてふ濱脇大隅屋かり尋侍りけるに、渡海の船にめされて、高松に赴き給ふと答ふ。聞くもあえず、そゝやと湊口に走り出れば真帆十分に捲て、はや洋中にたゆたへ行。けふハ海面一入のどかなれバ、胡鱗[注7]とるてふ船あまたありけるを見て。

おくるゝもいそぐもはかな　波の上に

よるべ定めぬ海士のつりふね

申時下りよりあなぜ[注8]つよく吹て、雨は盆を傾るが如し。相宿しける岡城士と共に、宴席をひらきてかたミに旅のつれ〳〵を慰む。

廿二日

雨も昼まへより霽[はれ]にければ、この里なる可秀てふ俳士の扉を敲きければ、中風とかいへるやまひを請て、歩行は更なり。口さえ吃りて謁見かなふまじと、猶子某のいへれば、空しく笻[注9]を帰す。それより生茂るてふならの柴津がね[注10]を見まほしとたどるうち、へふと濱脇のあハいに、いささかなる川あり、橋あり。そが元にゆくりなく芦月上人に行逢ぬ。こたミの船路おふさきるさ波風安らかにて、詠もいとど興ありぬ。かつ船中の吟なりと錦秀の句を聞へ給ふ、かたミに韵を探ッて詩を題す。

鷹嶺嶺頭月　鯉洋々上風　景光都耐賞　更使客愁空

おなじ心ニ向ふとぢなれバ、日の斜なるさへうち忘れて、うかれ歩行、燈ともし頃にもなりたれバ、あが舎りに伴ゐて、いさゝに酒[注11]をすゝめければ、旅にしあれバ事そぎかちなり。

温泉の臭を隠す新茶の匂ひ哉

旅の気さんじ見咎る人なけれバ、ほろ酔まぎれやつし[注12]がたに頬かぶりして、千客萬来の燈下に彳めるもいとおかし。それより楠てふ温泉に打つれてゆする[注13]し。上人ハ濱脇に、予ハ元のがりに帰りて伏す。

廿三日

芦月上人の旅亭を訪ひかへ（り）さ禅閣崇福寺に登る。

此地の眺望またたとふべき方もなし、ゆくりなく転結の二句を得つれども勝景の面白さに譲りて止ミぬ。

逆旅何悲我土満前佳景可無詩

けふは温泉あたりといふものにや、うなじ重く、肌熱し。ひねもす旅骨折の傍を離れず。合宿りしける鵜埜氏、予ガ寸の間にも筆取るを見て曰、さのミのものに凝り玉ふな。彼の学問の諸縁を止よとこそ摩訶止観にも侍れ。己が如くものすねばぬ身の気さんじなるを知らばまほしといへる。さればこそ鬼は地ごく好、仏は極楽すき、人は人すき、我は我すきと五老井[註14]がいひし如く、文字の法師、暗燈の禅師、ミなうぬ惚なりと返し打セしカども、おのれガもの案るさまの斯迄見にくゝいぶせきやと、その弁を作る。庭樹のしげミ、蝉のもろ声、茜さす朝の山のハ、いさなとる海原の夕あらし、見るもの聞ものにふれて、五七五に述ん事をおもひ、三十一文字につらねまほしく筆とり硯に向ひてハ、此もじ心にそまず、此手におばかく置かへたしとおもへれど、力およばずしてハ、つむりを低れ、毫の軸さへかミしぼりツゝ、身を悶るはいかなる事にやと、つくく〳〵おもふに、腸に風流なくして詩歌発句をつくらむにいカでか風状（情）を顕さむや。されバ糸竹の道にも心正しからざれバ、音色ミだるといへり、腸風流に成なバ、別に何を歟句上に需むべきや、言出まゝにして事足なむものをとハ思へど、冷暖自知の時至らざるにや。いまだ此くるしミをまぬがれず。されど、李可ガ血、老杜ガ痩なきにしもあらざる歟。かくおもふもまた好む方に片寄成べし。所詮生涯百里にたらぬ道の程、仰ぎて行人の日より見覚ゆるにもあらず。俯いて歩行ひとのもの拾ふにもあらず、と―かぎりも、なめくじりも勝手〳〵に行くべしと、人ハ言ふなるべし。よしや、そはとまれ、かくまれ、己はまたおのれガおもふくだりを述る。

廿四日

かゝなえ見れば、此許に旅寝して、夜には三夜、日には二日になりぬ。一まず鉄輪まで帰路を近づけ置、名立る湯瀧に耳を洗ひ[註15]しふる事にハ引かへて、病の垢をそゝぎ捨てなむと、人々にも暇を告げて出立つゝ、野

口山を越へ、石垣原にいたる。此里に八早、のぼり家〳〵に立ならべ、吹流し高くなびかし、まのあたり、いにしへの陣列をうつすガ如し。けふもまた吉弘公の墓前に笠打敷て暑を凌ぐ、かたえの木陰にもひとりの旅人、細々やカなる包ものと短刀を石頭にさしおゐて、膝かい抱て、やすらい居けるに、伴へる僕、淡婆姑(たばこ)の火かるとて、者なつこらしう四方山のはなしとり〳〵なり、予は弁にもいえりし如く、ものに苦しむの癖あれば

いつ来ても露を持ちけり苔の花

と口ずさミけるを、彼たび人聞付て、今一度吟じ玉ひねといへるから、また―うち吟じければ

夏さえ寒き楠の下風

と脇をつゞけたり。此人三十のうへは三ッ四ッや過なむと見ゆるに、この道にこゝろざしの深きにや、言下に賦たるさへに、意味もまた深し。予もとり敢ず、

親牛にすねる　べこの子引かセての

と第三をすへぬ。かの人は、おしてる難波わたりの人にて、公役にめされ、急ぎの使うけたまわりて、久かたの日むかの国に赴くよし。かぎりある日かずなれば、時うつすべからず、またのいのちのけふも有らわばとてわかれけり。また十四五丁ばかりも、行程に湯瀧の川下を渡る、夏日焼ガ如し。

温泉(ゆ)の尻や　此處まで来ても尚熱し

鉄輪の藤屋は以前かり舎りセしゆかりあれば、こたびも杖をとゞむ。けふ石垣原にての聯句の餘余情わすられかね、独り韵をつゝく

親牛にすねるゝゝゝゝ
火まわりわるい竈なりけり
月の酒勝手に結句よきいひて
ならんで見れば太き相撲取

下略

廿五日

湯瀧のミなもとなる海ぢごくを見むとて僕をゐて、朝まだきより節突走らしツゝ、松壽精舎を門前よりふし拝ミて、二百歩ばかり行ける道の傍に、熱泉涌出る事、幾處といふを知らず。そが中に紺屋地ごく・坊主地ご

くの名あり。こらすべてぢごく原といふとかや。それより羊腸の岨ミちをたどる事やゝ久しうして、海地獄あり。煙朦朧とたちのぼり、湯玉のわき上る音、おどろ〳〵とすさまじ。すさまじといふも愚なり。我も僕も只ほとけの御名を唱ふるのミそカくさなりける。五七五はさらなり。三十一もじにも意あまり侍れば、仮名の詩もて思ひをのぶる。

蓼くふ虫も己ガすき〳〵、海ぢごくにも魚の住ミけり。いづくも同じ六ツの衢ぞ、たゞたのむなり仏の御国。

けふはあガ為には、おもき精進日なれば、仏前に念誦して早くまくらにつく。

羇亭微酔唾方濃　遥憶家親夢裡逢　深夜醒来撫孤枕
湯瀧山寺一声鐘

歌

さしくしの暁のかねの音づれて
見はてぬ夢を驚かしぬる

廿六日

ひま行駒の足なみはやく、明日ははや、ふる里より迎馬よこす日にこそなりける。よて、柴せきの湯にも入ばやと思ひ居ければ、暇を告て、かしこに赴く。こは道の程二十丁にも、たるか、たらざる歟のとこなれど、九折なるそハみちなれば、かたへの木の根、つる艸をたづきにかろうじて温泉場にいたり、宿りを定む。雄鹿なく此山里と誘詠しけむさかのあたりはいざ知らず、四皓[註16]ガ隠れしも、かゝる住居成べしとこそ思ひやらるれ、幽閉を楽しむには最上の地なり。宿りさへ細々やかなる扃[註17]二軒の三家つくり、古代めきて屋根に茅生[註18]ひ、軒には蔦しのぶ這まつわり、窓の際より青垣山打かさなりツツ、豊国の由布山、雪のとよめりしミたけさへ、そが麓に有ながら見る事能ハず、星三ッ見るといふばかりなる谷間なり。

寝ながら見ゆる迄来るかのこかな

たそがれより雨に風さへ吹添いて、虎狼よりふる屋のもるこそ恐けれといふも宜なる哉。漏うけの桶、さばちに座を塞がれ、枕にひゞくぼち〳〵の音に終夜眠らず。

微風過去砌　細雨叩幽栖　深夜夢雑熟　忽聞報暁鶏

雨は、よもすがらふり、ふる家のもるに夢さえ結ばぬかりね、左あらぬだにものの憂き旅を、蛙のこへのうらめしきかな。

廿七日

けふは帰るべしと言置けりし日に成にたれど、雨はゐにゐてふる。さのミ待にもあらじと心ゆるみぬ。例のあさゐを僕に起こされツゝ、かたへを見れバ、相宿りの人たち、打つどひて囲碁・将棋をものしけるを見て、阿も此道に下手の横好セし事あれバ、これにうちまじりて、つれ〳〵なる長き日黄昏におよぶもしらず、囲碁・双六好て明しくらすハ四重五逆にもまさる罪なりと、或法師ハ書れたれど、かけまくも神君の御遺訓には、雨の日などの徒然には、あしきものにてもなしと仰られき。

夜に入て雨晴たり。客舎聞蛙。

流水潺溪繞舎通　群蛙閣々思無窮　却哂徒為愁人叫
不学留名淺中

廿八日

きのふは雨にさへられて、帰故の延にければ、けふはまだ明きらぬより、支度調へて出かけるに、駒ヶ坂越る頃おいより、雨もしと〳〵降出ける。

さなきだに見へもわかぬに雨雲の
八重たちこむる　ふる郷のそら

せんすべなけれバ、ひぢかさ雨にぬれ〳〵小浦にいたり爰にて雨の調度ものして、急ぎけるに、頭成の町はずれにて、はからず松雲齋のうしに行逢ぬ。翁曰、予が別荘爰にあり、つえを寄セねとせちに留るものから、無下に袖ふりきるもなめげなる業なりと跡に付て到るに、少し市中の俗塵をよぎて、貴布祢のやしろに隣て、草庵をむすべり。宮のうらハいふも更なり、伊豫路かけての見はらし、おちこちの景光千百に尽すべからず。

すゞしさや海あり山も遠からず

翁には、小堀の深き流を汲む茶の示ししに預りし。急にしあれば、心うらなくもの語りして、おもひの外時うつりぬ。僕にせかれて、尽ぬ名殘の袂を分つ。さて名立る鹿鳴越の南の登り坂にかゝる。手のひら立る如

き山路翠微をわけのぼるに、雨ハやミにけりど、靄深く立込めて寸地も見へわからず。

見て置たつゝじは何所歟　靄の底

走り水てふ處にて迎の馬に逢ふ。先ふる郷の無事を聞てよろこぶ。こゝにてわり子を遣ひ、馬にまたがり、手綱かいくり急ぐほどにあし曳の山家てふ處にいたる。此里なる市の宮てふ處より暫行て、大杉のおかしく蟠れる元へ石仏います。こゝら四五百歩カ程、山のかいより小芙蓉ガ峯あざやかに見ゆ。おもへばや、予が住める佛の江[註19]より八蓮台寺のミね[註20]高く聳えて眺望をさゆ。さればまた来るまでの名殘にと、馬を駐めてふり返れど

あのずんと湯布見上るや入梅の空

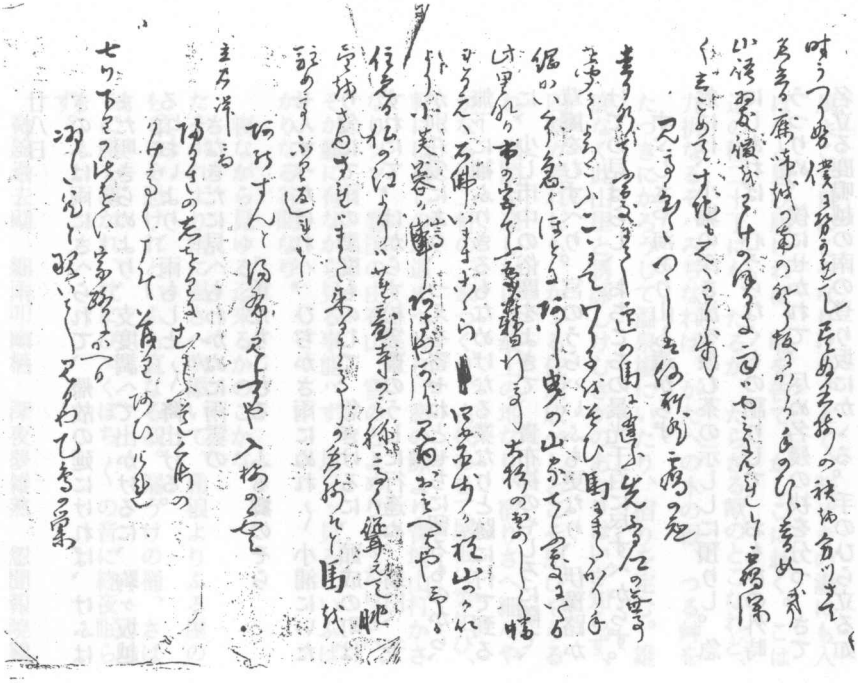
立石峠にて

帰るさのしおりにむすぶ道くさの

夕け高くこそ茂りあひけれ

七ッ下りの頃をい家路にかへる。

翔だ歟と覗いて見や乙鳥の巣



註

1 本地垂迹ノ神

2 吉弘統幸のこと

3 九原＝『礼記』の「檀弓」に「然光台夫於九原」とあり、黄泉を指す。

4 大禍時・逢魔が時・大凶時。黄昏時のこと。

5 亥ノ中の時。午後十時。

6 杵築の僧か。

7 鰣＝音はシ・ジ。胡鰣はヒラ・箭魚。

8 あなぜ＝西北風。あなじ。

9 杖。

10 四極が峰。高崎山。

11 いささめに＝仮に。ちょっと。

12 やつしがた＝俏し形。

13 ゆるすし＝泔すし。

14 森川許六の号。

15 耳を洗う＝『後漢書』に「或掩目而淵潛、或盥耳而山據」とあり、汚れた事を聞いた耳を洗うと言う事。

16 四皓＝商山の四皓＝秦の時、東園公・綺里奇・夏黄公・角里先生が秦を避けて商山に隠れた事を云う。

17 扃＝音はテン。門戸のこと。

18 寀＝音はサイ。うつぼのこと。

19 佛の江は水先村の東部、高田との境の地名。

20 蓮台寺は不明。「蓮台寺のみね」とは御許山を指すのか。

参考文献

『俳匠金谷弗水』　大塚富吉著　大分県郷土文化研究会　一九五七年

『大宇佐郡史論』　小野精一編　宇佐史談會　一九三一年